

世界への気遣いとしての活動的生

— ハンナ・アーレント『活動的生』における活動の場所指定の重要性 —

林 大地

0. はじめに — 『活動的生』は何を問うているのか

「活動しているとき私たちは何をしているのか」(VA: 14) — アーレントはその主著『活動的生』の序論で、こう問うた。これは『活動的生』を貫く根本的な問いであり、この浩瀚な書物の根底にはつねにこの問いが横たわっている。アーレントが本書を通じて行なっていること、それは、「活動しているとき私たちは実際に何をしているのかをじっくりと考えること」(VA: 14) 以外の何ものでもない。しかしなぜ、アーレントはこのあまりにも素朴な問いを發したのか。その答えは単純である。つまり、私たちはもはや活動しているとき何をしているのかよくわからなくなっているからこそ、彼女はこの問いを發し、これを本書の主題に据えたのだ。

そして、このように問うことによって浮かび上がってくるもの、それが活動的生内部の区分である。アーレントは活動的生を、労働、制作、行為という三つの活動に分節化した。つまり、私たちは活動しているとき、労働しているか、制作しているか、行為しているのである。アリストテレスが提唱した三区分 — 制作、行為、観想 — を換骨奪胎して練り上げられた、アーレント独自のこの三区分 — 労働、制作、行為 — をめぐる分析が、『活動的生』の中心をなしている。これら三つの活動はそれぞれいかなる活動なのかという理論的な問い、これら三つの活動は近代においていかなる相互関係を演じてきたのかという歴史的な問い、これら二つの大きな問いを主軸としながら、アーレントは議論を展開していく。

しかし、ここで見逃してはならないのは、近代以降、活動的生内部の区分=分節化は曖昧なものになったという事実である。現代を生きる私たちには、労働、制作、行為という原理的にまったく異なるはずの活動を截然と区別することができない。そして区別することができないからこそ、私たちはもはや活動しているとき何をしているのかよくわからない。活動的生内部の区分=分節化をあってないようなものとしてきたのが近代という時代なのであり、だからこそ「活動しているとき私たちは何をしているのか」と問うことには意味がある。つまり、このように問うことは、今や見失われてしまった区別をふたたび浮かび上がらせることにつながるものであり、そうすることで私たちは、三つの活動のあいだに明確な境界線を引くことができるのである。アーレントがこの問いを發した理由はここにあると考えてよいだろう。

本稿は、アーレントのこうした問題意識を踏まえうえて、「活動の場所指定 *Lokalisierung der Tätigkeiten*」という現象に焦点を当てる。活動の場所指定が意味するのは、「人間の活動は

いわば宙に浮いているのではなく、それにふさわしい場所を世界のうちに有しているということ」(VA: 90)である。労働には労働にふさわしい場所が、制作には制作にふさわしい場所が、行為には行為にふさわしい場所がある。アーレントはそうした現象を指し示すために、活動の場所指定という用語を作り出した。そして本稿が主張したいのは、アーレントが何よりも危惧していたのは、この活動の場所指定が打ち破られるという事態であること、つまりある活動がその指定された場所を超え出て、自らにふさわしくない領域にまで入り込んでしまうという事態であること、これである。活動の場所指定の重要性を理解することなくして、『活動的生』の眼目たる近代批判を理解することはできない。活動の場所指定の重要性を浮かび上がらせること、ならびにそれが打ち破られることの危険性を示すこと、それが本稿の目的である。

たしかに先行研究においても、活動の場所指定が打ち破られることの危険性はたびたび指摘されてきた。たとえば、Villa (1996) はとりわけ、制作する人の思考様式や制作に固有の原理が拡大したことを問題視し、この拡大が世界疎外を引き起こす原因になったと主張する。また、森 (2018) はとりわけ、あらゆる活動がひとしなみに労働と化していくことや、人びとがみな労働する動物と化していくことを問題視し、これに抗って三つの活動の区別、なかでも労働と制作の区別を強調する。さらに、百木 (2018) はとりわけ、社会的なものの台頭とともに労働が肥大化したことを問題視し、これに対して、三つの活動の三角形バランスを保つこと、また制作を通じて世界を形づくることを提唱する。これら代表的な先行研究はいずれも、活動の場所指定が打ち破られることに危機感を示し、この打破が世界を破壊することにつながると示唆している。しかし、これらの先行研究は、活動の場所指定それ自体を主題に据えているわけではないため、これを詳細かつ体系的に論じることはしていない。また、活動の場所指定とそれが打ち破られることの危険性を論じるのであれば、そもそも活動とは何か、活動的生とは何か、世界とは何かということが明らかにされていなくてはならないが、それも十分に為されているとはいいがたい。それゆえ本稿は、活動の場所指定それ自体を主題に据え、これを詳細かつ体系的に論じること、ならびにこの現象を論じるうえで不可欠の諸概念——活動、活動的生、世界——を簡潔に整理することを試みる。

そこで本稿は、以下の構成をとる。第一節では、活動の場所指定について論じるための準備作業として、活動的生を構成する三つの活動、活動的生それ自体、そして世界概念が、『活動的生』でどのように論じられているのかを確認する。第二節では、活動の場所指定という現象、およびそれに生じた異変について論じる。本節で示唆されるのは、活動的生は世界を形成することもあれば世界を破壊することもあるということ、もっと言えば、活動の場所指定が守られているとき、活動的生は世界を形成するが、活動の場所指定が打ち破られているとき、活動的生は世界を破壊するということである。第三節では、活動的生のあるべき姿として、「世界への気遣いとしての活動的生」というあり方を浮かび上がらせる。世界への気遣いとは何か、三つの活動はどのようにして世界を気遣うのか、こうした問いに答えるのが本節の目的である。「おわりに」では、以上の議論を踏まえて、次のことを試論として提示する。すなわち、破壊されゆく世界を気

遣うことが今でも可能であることを示すために、アーレントは『活動的生』を著わしたのではないか、ということである。アーレントが本書を通じて浮かび上がらせようとしたもの、それはまさに世界への気遣いとしての活動的生というあり方ではなかったか。そして現代に生きる私たちが為すべきこと、それは破壊されゆく世界をそれでも気遣うことではないか――。

1. 活動的生とは何か ― 『活動的生』の基本的な構造

1-1. 三つの活動とその条件 ― 労働、制作、行為

活動的生は、労働、制作、行為という三つの活動から構成される。それぞれの活動に対応する条件は、生命それ自体、世界性、複数性である。「活動的生 *Vita activa* を、本書では、人間の三つの根本的活動、すなわち労働、制作、行為を総称する言葉として用いることにする。これらが根本的活動であると言えるのは、それぞれの活動が、人類がそのもとで地上における生を与えられる根本的条件に対応しているからである」(VA: 16)。そこで以下では、労働、制作、行為がそれぞれいかなる活動であるのかを、簡単に整理しておこう。とりわけ注目したいのは、労働と制作の違いである。

アーレントは奇妙にも、労働と制作を明確に区別する。それはたしかに、「普通に行なわれていることではない」(VA: 99)。しかし、後に見るように、アーレントが近代の何を問題にしているのかを理解するうえで、この区別はきわめて重要である。では、労働と制作はいかにして区別されるのか。要点を整理すれば、両者は大きく分けて、1) 根本的条件、2) 生産物、3) 生産様式、という三つの観点から区別されると言えるだろう。まず労働は、1) 生命それ自体という根本的条件に対処するための活動であり、2) 生み出されるやいなやすぐさまむさぼり尽くされ消えてゆく消費財を生み出す活動であり、3) 始まりも終わりをもたない円環的な運動である。それに対して制作は、1) 世界性という根本的条件に対処するための活動であり、2) いったん生み出されたらそこにどっしりととどまり続ける使用対象物を生み出す活動であり、3) 明確な始まりと終わりをもつ直線的な運動である。労働と制作はつねに対比的に捉えられており、そこにはいつも、1) 生命と世界、2) 消費財と使用対象物、3) 円環と直線、といった二分法が働いている。労働と制作は、似て非なる活動なのである。

また、労働からも制作からも区別される行為は、上記の観点にあえて当てはめれば、1) 複数性という根本的条件に対処するための活動であり、2) 物語という掴みどころのない非物質的な産物を生み出す活動であり、3) 明確な始まりをもつが終わりはもたない運動である。とはいえ、労働と制作が人と物のあいだで営まれる活動であるとすれば、行為は人と人のあいだでじかに演じられる活動であるため、両者のあいだには看過できない大きな違いがある。

以上見てきたように、労働は生命それ自体に、制作は世界性に、行為は複数性に対応する活動である。しかし、これら三つの活動はいずれも、可死性と出生性という根本的条件にも同じく対

応している。つまり、労働、制作、行為はそれぞれの仕方、人間がこの世界に生まれ落ちること（≒出生性）、およびこの世界から消え去ること（≒可死性）に対処するのである。

三つの根本的活動と、これらに対応する条件はどれもさらに、人間の生の最も一般的な被制約性に根差している。すなわち、誕生によってこの世界にやってきて、死によってこの世界からふたたび消えてゆくという被制約性にある。可死性に関して言うと、まず労働は、個体の生存と種の存続を保証する。次に制作は、人工的世界を打ち建てる。この世界は、そこに住んでいる者たちの可死性からある程度独立しており、それゆえ彼らのはかない生に、存続や持続といったようなものを提供する。最後に行為は、それが政治的公共団体を創設し維持することに力を尽くすかぎりにおいて、世代間の連続性のための、すなわち想起と、それとともに歴史のための条件を創り出す。同様に、三つの活動はすべて、出生性にも方向づけられている。なぜなら、これらの活動はつねに、将来のことを気遣うという責務も有しているからである。言いかえればこれは、生命と世界が、よそ者としてこの世界に生まれてくる新参者たちの不断の流入に耐え抜き、それに備え続けることができるように気遣うという責務である。(VA: 17-18)

労働は生命の存続を保証することで、制作は人工的世界を打ち建てることで、行為は政治体を創設し維持することで、可死性に対処する。つまり、死すべき存在である人間たちに不死性を授けるのである。またこれら三つの活動はどれも、将来のことを気遣うことで、言いかえれば、生命と世界がこれからも維持されるよう気遣うことで、出生性に対処する。つまり、子どもたちがこの世界に誕生することができるように取り計らうのである。このようにして活動的生を構成する三つの活動は、可死性と出生性に対処することで、もっと言えば、生命と世界をともに気遣い、両者を不断に維持形成し続けることで、不死性の獲得と子どもの誕生を可能にする。不死性の獲得が政治の目的であり (VA: 68-69)、子どもの誕生が政治の前提であることを考えれば (VA: 316-317)、ここに活動的生の大きな意義が存していることがわかるだろう。またここで留意しておきたいのは、可死性と出生性に対処する、つまり不死性の獲得と子どもの誕生を可能にするうえでは、どの活動が欠けてしまってもならないということである。労働、制作、行為のすべてが揃ってはじめて、私たちは可死性と出生性に立ち向かうことができる。生命と世界をともに維持形成するためにそれらを気遣うという観点から見た場合、これら三つの活動のあいだにヒエラルキーは存在しない¹⁾。

1-2. 活動的生それ自体 — 世界と活動の相互依存関係

前節で論じたのが活動的生のいわば中身であったとすれば、本節で論じるのは活動的生のいわば外枠である。では、活動的生それ自体はいかなるものであるのか。

活動的生とは、活動的なあり方に関わり合っているかぎりでの人間生活のことである。それは、人間の世界と物の世界のうちをゆれ動いており、この世界から立ち去ることも、それを超越することも、決してない。人間の活動はどれも、物たちと人びとに取り囲まれながら行なわれるのである。この周囲環境のうちで、人間の活動はそれぞれ場所を指定されており、この周囲環境がなければあらゆる意味を失ってしまう。人はみな周囲環境としての世界に生まれ落ちてきたのだが、そういう世界のほうもこれはこれで、その存在を本質的に人間に負っている。つまり、人間が物を制作し、土地と風景を美しく保ちながら配慮し、人間共同体にあっては行為しつつ政治的関係を組織するおかげで、世界は存在するのである。

(VA: 33)

ここから読み取れることは、まず二つある。それは、1) 活動的生は、人の世界と物の世界という二重性を帯びた世界のうちで営まれるということ、2) 活動的生を構成する三つの活動は、それぞれの仕方世界を存在させるということ、の二つである。前者と後者はそれぞれ、1) 活動は世界を必要とすること、2) 世界は活動を必要とすることを意味する。世界は活動に意味を与え、活動は世界に存在を与えるのである。世界と活動の相互依存関係が、ここには描かれている。世界のうちで営まれつつ、その営みを通じて世界を存在させるもの、それが活動的生なのである。

また後者に関して付け加えておくと、物を制作することは制作の役目であり、土地と風景を美しく保ちながら配慮することは労働の役目であり、行為しつつ政治的関係を組織することは行為の役目である。つまり、それぞれの活動がそれぞれの指定された領分でそれぞれの役目を果たすことによって初めて世界は存在し得るのであり、どの活動が欠けてしまっても世界は存在し得ないのである。世界を必要としつつ、世界から必要とされること、世界から意味を与えられつつ、世界に存在を与えること、ここに活動的生の特徴は存する。世界は人の世界と物の世界から成り立つこと、世界と活動は相互依存関係にあること、この二点をここではおさえておきたい。

しかし、ここから読み取れることがもう一つだけある。それは、活動はそれぞれ場所を指定されている、ということである。とはいえ、上記の引用文だけでは、活動の場所指定がいかなる現象であるのか、いまだ判然としない。そこで次節では、活動の場所指定という現象に焦点を当て、その内実を明らかにしていくことにする。ただその前に整理しておきたいのが、アーレントの世界概念である。アーレントの思想を理解するうえで、世界概念を抜きにすることはできないと言ってもよいほど、彼女の思想のなかで「世界 Welt」という概念は格別の位置を占めている。それゆえ、議論を前に進めるためにも、まずは世界という複雑に入り組んだ概念を解きほぐす必要があるのである。

1-3. アーレントにおける世界概念——人工物の世界と人間事象の世界

まずは先行研究において、世界概念がどのように論じられてきたのかを一瞥しておこう。森

(2020) は、世界を、1) 物の世界、2) 間としての世界、3) 人間事象の世界、の三つに分類する。また、Jaeggi (2011) は、世界を、1) 造られた世界としての世界、2) 共通世界としての世界、3) 公的な現われの空間としての世界、の三つに分類する。たしかに微妙なずれはあるものの、両者における世界概念の分類の仕方は概ね一致しており、ともに世界を、物に関わるか（これは上記の定義1に対応する）、それとも人に関わるか（これは上記の定義3に対応する）で分類している。とはいえ、図式的に言えば、まず制作を通じて物がつくられ（定義1：人工物の世界）、つくられた物のもとに人びとが集まり（定義2：人工物の世界+人間事象の世界=間としての世界）、そこで人びとは言論を交わしつつ行為する（定義3：人間事象の世界）というかたちで、三つの定義は相互につながり合っているとと言えるだろう。たしかに世界という概念は、大きく分ければ、物に関係する人工物の世界、人に関係する人間事象の世界、人と物に関係する間としての世界、の三つに分類することができる。しかし、これら三つの世界はそれぞれ別個に存在しているわけではないのである。以下の文章は、そのことを最も明瞭に示している。

世界はむしろ、人間の手になる形成物であり、それとともに、もっぱら人びとの間で演じられる事象すべての総体でもある。人間事象の世界は、制作された世界のうちに紛れもなく現われるのである。世界のうちに共生するということは、本質的に、物の世界がそこを共通の住みかとしている人びとの間に横たわっている、ということの意味する。しかもそれは、机がそれを取り囲んで座っている人びとの間に立っている、ということと同じ意味である。どんな間 *Zwischen* もそうであるように、世界は、それをそのつど共有している人びとを、結合させるとともに、分離させるのである。(VA: 65-66)

ここに描かれているのは、1) 制作を通じて、人工物の世界が打ち建てられる、2) そこに人びとが集うことで、間としての世界が立ち現われる、3) そこで人びとが言論を交わしつつ行為することで、人間事象の世界が創り出される、という三つの世界の相互関係である。つまり世界は、「人間の手になる形成物」(=人工物の世界) であると同時に、「人びとの間で演じられる事象すべての総体」(=人間事象の世界) でもあり、こうした世界のうちに共生するということは、「物の世界がそこを共通の住みかとしている人びとの間に横たわっている」(=間としての世界) ということの意味するのである。アーレントが「世界」という言葉を用いるとき、そこにはこうしたさまざまな意味合いが込められている²⁾。

2. 活動の場所指定とそれに生じた異変 — 非本来的で世界破壊的な活動的生

2-1. 活動の場所指定という現象 — 活動の場所依存性

『活動的生』には、「活動の場所指定」と題された節がある。その冒頭で、アーレントはこう

指摘する——「人間の活動にはいずれも何かが本来的に内在しているように見える。これが示しているのは、人間の活動はいわば宙に浮いているのではなく、それにふさわしい場所を世界のうちに有しているということである」(VA: 90)。そして「このことは少なくとも、活動的生を構成する主要な活動、すなわち労働、制作、行為に当てはまる」(VA: 90)。活動はそれぞれ、それにふさわしい場所を世界のうちに指定されている。この活動はこの場所で行なわれるべきである、という共通理解がそこにはある。たとえば、後に見るように、労働には私的領域が、制作には生産の領域が、行為には人間事象の領域がふさわしい、というように。

しかしここで注意すべきは、活動の場所指定という現象は、アーレントが思いつきで提唱したものではないということ、むしろそれは活動それ自体の本性に存しているということである。「ある特定の活動がいかなる場所を指定されるのか、また、公的なまなざしに曝されるにふさわしいのはどの活動であり、私的領域に隠される必要があるのはどの活動であるのかについて、歴史的に伝えられているかぎりでは、さまざまな政治共同体のあいだで合意が見られるが、この合意は、恣意的なものでもなければ、たんに歴史的事情のせいでもなく、事柄それ自体の本性に存しているのである」(VA: 96)。そして、活動の場所指定という注目すべき現象を説明するための事例として、アーレントが持ち出すのが、善行という行ないである。

善行とは、端的に言えば、決して見られたり聞かれたりしてはならない行ないである。「というのも善行は、公的に周知となるやいなや、善意というそれ特有の性格を、当然のことながら失ってしまうからである」(VA: 91)。善行は、他者によっても、さらには自分自身によっても、見られ聞かれてはならない。「意識して善行をなす人は、もはや善人ではない」(VA: 91)のである。それゆえ、イエスは言ったのだ。「あなたの右手が何をしたのかを、左手に知らせてはならない」と。これは感覚的にも理解できる議論だろう。善行が公的なものとなるとき、言い換えれば、人前でこれ見よがしに善行がなされる時、それは善ではなく偽善となる。公的な善意は、「もはや本来の善ではないのみならず、著しく腐敗しているのである」(VA: 95)。

この世界で行なわれてなくてはならないのに、この世界に現われてはならないという奇妙な側面をもつ活動、それが善行という行ないである。ゆえに善行は、公的領域はもちろんのこと、私的領域にもそれにふさわしい場所をもたない。善行が指定された場所を超えて、公的なまなざしに曝されるとき、それは善から偽善へとその本性を変える。公的領域で行なわれる善行は、いわば非本来的なものなのである。善行という事例はたしかに極端なものではあるが、この事例に即してみると明らかになることがある。それは、「人間の活動的なあり方の意味が、どれほどその活動が遂行される場所に依存しているのか」(VA: 96)ということである。活動の場所依存性が、ここには明瞭なかたちで表われている。

2-2. 活動の場所指定に生じた異変——社会的なもの台頭と労働の公的領域への進出

ここで少し寄り道をして、『活動的生』の構成に触れておきたい。「活動の場所指定」と題された第十節は、第二章「公的なものの空間と、私的なものの領域」の最後に位置している。第二章

で描かれるのは、近代の幕開けとともに誕生した社会的なものの台頭によって、公的領域と私的領域の区別がぼやかされたという事態である。社会的なものはつまり、これら二つの領域のあいだに厳然と存在していた裂け目を消し去ったのである。さらにそれとともに、古代から近代の始まりに至るまでずっと、私的領域のうちに場所を指定され、そこにとどまっていた労働という活動が、公的領域に進出することになる。労働は、「生命プロセスそれ自体がそのうちをゆれ動く、絶えざる永遠回帰の円環に囚われたまま、何千年にもわたってずっと変わらずにあり続けることができた」(VA: 59) にもかかわらず、今や公的領域への入場を許されるようになった。そしてその結果、労働にはある変化が生じた。「労働の公的領域への入場は、労働のプロセスを、円環を描く単調な繰り返しから解放し、急激に進歩する発展のうちへと駆り立てた」(VA: 59-60) のである。円環的な運動を繰り返し続けていた労働は、近代に至って、螺旋的あるいは直線的な運動を繰り返し続けることになる。では、その帰結としていったい何がもたらされたのか。それは、労働が人びとの生活を支配するという由々しき事態である。人びとは、労働にかかずらう労働する動物へと、その姿を変えていく。労働は、制作と行為に対して優位に立ち、それらを呑み込みながらひたすら肥大化していく。社会的なものの拡大と世界疎外の進行はとどまるところを知らない。このとき、活動的生内部の区分=分節化はもはや存在しない。すべての活動はひとしなみに労働であると解釈されるからである。

こうした劇的な展開が、第二章(と第六章)では披露される。そして、古代から近代にかけての諸領域間ならびに諸活動間の相互関係を描き出した歴史的分析を締めくくるものとして登場するのが、活動の場所指定をめぐる議論なのである。社会的なものの台頭および労働の公的領域への進出によって、諸領域間および諸活動間の区別が曖昧なものになってしまった状況を受けて、それでもアーレントは、活動の場所指定という現象を示すことで、それらの区別を強調する。たとえば、労働は私的領域に場所を指定されていると指摘するとき、そこに含意されているのは、(制作とも行為とも区別される)労働は、(公的領域とも社会的なものの領域とも区別される)私的領域に、その場所を指定されているということだろう。それぞれの活動はそれぞれにふさわしい場所をこの世界のうちに有している。私たちはこの事実を決して見過ごしてはならない。なぜなら、「公的空間の性格は、どんな活動がそこを満たすかに応じて変化するし、活動の本性もまたこれはこれで、それが私的に為されるか公的に為されるかに応じて変化する」(Va: 59) からである。活動の場所指定は、些末な現象ではない。「ある活動が私的に行なわれるか公的に行なわれるかは、決してどうでもよいことではない」(VA: 59) のである。近代以降、とりわけ労働という活動がその指定された場所をつねに超え出てきたことを考えれば、活動は場所を指定されていると主張することは、それだけでもう、区別を消し去ろうとする近代の趨勢に抗うことを意味する。活動の場所依存性を強調することは、時代に逆らって、活動的生内部の区分=分節化を強調することにつながるのである。

以上の議論から明らかとなったのは、アーレントが近代への異議申し立てとして、活動の場所指定という現象を持ち出した、ということである。社会的なものの台頭によって、公的領域と私

的領域の区別が曖昧にされたと同時に、労働の公的領域への進出によって、活動的生内部の区分＝分節化も曖昧にされた時代、それが近代であった。そしてアーレントは、この近代という時代の流れに乗るつもりはないことを示すかのように、活動の場所指定をめぐる議論を第二章の末尾で突然展開するのである。

2-3. 活動的生の世界形成的側面と世界破壊の側面——活動の場所指定という分水嶺

活動の場所指定が打ち破られるという事態、言いかえれば、ある活動がそれにふさわしい場所を超えて、別の活動にふさわしい場所にまで乗り出してしまうという事態は、たしかに近代において顕著になったものの、この事態は古代から現代にかけて絶えず生じてきた。次の文章が、それを示している。

すでに見たように、労働の労苦が現代に至って見かけ上は克服され、すべての生命にのしかかる強制的な必然が事実として軽減されたことは、次のような帰結をはじめもたらした。すなわち、制作も今や労働プロセスの形態で行なわれ、その産物である使用対象物は、あたかも労働によって準備された消費財であるかのように消費されるのである。能力をその能力とはもともと疎遠な領域へと移すこれと似たような転移が生じたのは、行為を人間事象の領域から可能なきがら排除し、この人間事象をあたかもそれが制作の法則に従属しており、対象的世界の客体と同様にしっかりとした計画性をもって規制できるかのように取り扱おうと真面目に試みられたときであったように思われる。では、その最終段階にまで至った近代と、私たちがもうすでにそのうちで暮らし始めている未来との真の違いは、どこにあるのか。それは、人間がいなければ決して生じなかったであろう自発的プロセスを解き放つところにその本質が存する行為する能力を、人間が自然に対して向けているという点にあるように思われる。(VA: 293-294)

ここには、三種類の越境行為＝境界侵犯が描かれている。すなわち、1) 近代において、労働が私的領域から公的領域に進出した事態、2) 古代において、制作が生産の領域から政治の領域に進出した事態、3) 現代において、行為が人間事象の領域から自然の領域に進出した事態、の三つである。そして、こうした越境行為＝境界侵犯を通じて破壊されるもの、それが世界である。すなわち、1) 使用対象物をあたかもそれが消費財であるかのように扱い、人工物の世界を破壊することによって、2) 行為を制作に置きかえ、人間事象の世界を破壊することによって、3) 自然を世界のなかに導き入れ、自然と世界をこれまで分け隔ててきた境界線を取っ払うことによって、1) 人工物の世界、2) 人間事象の世界、3) 自然と世界の境界線は、それぞれ破壊されてしまうのである。

ただし、古代ならびに現代において生じた事態についてはさらなる説明が必要だろう。古代において生じた事態については、『活動的生』の第三十一節「行為に代えて制作を置き、行為を余計

なものにしようと試みてきた伝統」が詳しい。アーレントが何度も強調するように、行為は予測不可能性と不可逆性をその特徴とする (VA: 279)。たとえば、自分が何らかの言葉を発したとする。その言葉はもしかすると、ほかの人びとの心に深く刻まれ、彼らを思わぬ方向へと導くことになるかもしれない。行為はほかの人びとを触発し、さらなる行為を引き起こすのである。この行為の連鎖はどこまでも果てしなく続いてゆく。それは、行為は人びとのあいだで為されるから、言い換えれば、行為は複数性という条件のもとで為されるからにほかならない。行為によって「触発される人びとの数は、原理的に限界をもたない。なぜなら、[……]一つの行為の結果は、人間事象の果てしない網の目という媒質に入り込んでゆくからであり、その媒質においては、いかなる反応もいわば自動的に連鎖反応となり、いかなる過程もすぐさまほかの諸過程を引き起こすからである」(VA: 237)。私たちはこのとき、行為の結果がどうなるのかを予測することも、行為をなかったことにすることもできない。私たちはもはや、自分が為した行ないの結果をコントロールすることができないのである。

プラトンは、行為に特有のこうした危険性を除去したいという誘惑に抗うことができなかった (VA: 292)。プラトンはそれゆえ、「人間以外のあらゆる材料を扱うのと同じように人間を扱うこともおそらくできそうだ、というユートピア的な希望」(VA: 234)を抱きながら、支配 - 被支配関係、あるいは言い換えれば、命令 - 服従関係を政治に持ち込み、人びとをきつく縛り上げることで、行為の可能性を消し去ろうとした。制作において、たとえば職人が制作プロセスを完全に掌握しているように、プラトンは政治の領域から予測不可能性や不可逆性を排除することで、人間事象の領域を完全に掌握しようとしたのである。制作を行為の代わりとすることで、もっと言えば、制作の安定性によって行為の偶然性を克服することで、行為を余計なものにすること、ここにプラトンの目的があった。しかしそうすることで、行為ならびにその条件である複数性は根絶やしにされてしまう。そしてそれとともに、複数の人びとが自由に行為することで創り出される人間事象の世界も、同様に破壊されてしまう。制作が生産の領域から政治の領域に進出することで人間事象の世界が破壊されるというのは、こうした事態を意味している。

また現代において生じた事態について言えば、これの極端な事例は、元素プロセスを解き放ったこと、すなわち核分裂を引き起こしたことである (VA: 294, BPF: 60)³⁾。人類は、「原理的に分割不可能とされてきたものを分裂せしめ、天然には存在しない放射性元素を人工的に創造し、ついに、人類を自滅させるに十分な破壊力を秘めた核エネルギーを解放する」(森 2013: 183)ことに成功した。私たちはつまり、自然に介入しつつ行為することで、核分裂の連鎖反応という人間がいなければ決して生じることのなかった自発的プロセスを解き放ったのである。それからというもの私たちは、核分裂を利用した原子力発電の恩恵を存分に受けながら、この世界のうちに暮している。しかし、そこには看過できない大きな危険がひそんでいる。それは、自然と世界を分け隔ててきた境界線が融解するという危険である。「私たちは、現代以前のいかなる歴史時代においても、人間の世界を自然の猛威から慎重に守り、自然の猛威をできるかぎり人間の世界から遠ざけてきたのだが、私たちは今やその反対に、まさにこの自然力を、その猛威のまま、人間

の世界のただなかに導き入れている」(VA: 175-176)。要するに私たちは、「自然的要素と人工物のあいだにある防衛戦を消し去ってしまった」(BPF: 60) ののである。その結果、世界は自然の猛威に絶えず曝され、存続の危機に瀕することとなった。

しかも、自然に介入しつつ行為するとき、そこには予測不可能性と不可逆性に対する救済策、つまり約束と赦しが存在しない。なぜなら私たちは、人間が相手なら、約束を交わし合い、赦しを与え合うことができるが、自然が相手ならそうはいかないからである。現代の自然科学が為していること、それはまさに、「その結末が不確実で予測のつかない過程を引き起こすこと、取り消すことのできないプロセスを導き入れること、自然界にはこれまで見込まれていなかった諸力を生み出すこと」(VA: 295) なのである。どういった結末をもたらすのか予測がつかないばかりか、その結末をなかったことにすることもできない自然のプロセスを、この世界のただなかに導き入れること、それが現代人たる私たちの為していることである(チェルノブイリや福島で実際に起こったことを考えてみればいい)。行為が人間事象の領域から自然の領域に進出することで自然と世界の境界線が破壊されるというのは、こうした事態を意味している。

まとめると、1) 労働は近代において、私的領域から公的領域に進出することで、人工物の世界を破壊した、2) 制作は古代において、生産の領域から政治の領域に進出することで、人間事象の世界を破壊した、3) 行為は現代において、人間事象の領域から自然の領域に進出することで、自然と世界の境界線を破壊した、ということになる。古代から現代にかけて、活動の場所指定は絶えず打ち破られてきた。労働は私的領域に、制作は生産の領域に、行為は人間事象の領域に、それぞれ場所を指定されているにもかかわらず、これら三つの活動はそこから絶えず抜け出してきた。その結果、世界はその存続が危ぶまれることになったのである。

以上、前節と本節で確認したことから言えることは何か。それは、活動の場所指定が守られているとき、活動的生は世界を形成するが、活動の場所指定が打ち破られているとき、活動的生は世界を破壊する、ということである。前節で確認したように、活動的生は本来、世界を存在させるという役割を担っている。しかし本節で確認したように、活動的生を構成する活動がその場所指定を打ち破ると、それらは世界を破壊することになる。つまり活動的生は、それを構成する活動が場所指定を守っているか否かに応じて、世界形成的にもなれば、世界破壊的にもなるのである。ここにおいて活動の場所指定は、活動的生が世界形成的であるか世界破壊的であるか、あるいは言いかえれば、本来的であるか非本来的であるかを定める、いわば分水嶺となっている。

だとすれば、こうも言えるのではないか。活動の場所指定が打ち破られることで、活動的生が非本来的で世界破壊的なものになっている現代という時代にあって、私たちが為すべきことは、活動的生の本来的で世界形成的な側面を取り戻すこと、もっと言えば、今や曖昧なものになってしまった活動的生内部の区分=分節化を明確にし、それぞれの活動にふさわしい場所を指定してやることではないか、と⁴⁾。このとき浮かび上がってくるもの、それが「世界への気遣い *Sorge um die Welt*」としての活動的生というあり方である⁵⁾。

3. 世界への気遣いとしての活動的生 — 本来的で世界形成的な活動的生

3-1. 世界への気遣いとは何か — 世界を不断に維持形成し続けること

『政治とは何か』で、アーレントはこんな印象的な一節を残している — 「政治の中心にいつもあるもの、それは世界への気遣いであって、人間への気遣いではない」(WIP: 24)。つまり「政治は、厳密に言えば、人間というよりはむしろ、人びとのあいだに生じつつ、人びとを超えて存続する世界と関わりをもつ」(WIP: 105)。アーレントがここで「世界への気遣い」という言葉で何を言わんとしているのか、それは正確にはわからない。しかし、『政治とは何か』や『活動的生』を読むかぎり、近代以降、世界への気遣いは失われてしまったとアーレントが考えていることだけは、どうやら確かなようである。

たとえば『活動的生』では、こう言われている — 「新しく登場した労働者階級は、文字通りその日暮らしの生活を送り、生活の必要という強制とその絶対的緊急性に服していたばかりでなく、まさにこの強制を通じて、生命プロセスからおのずと生じるわけではない一切の気遣いと労苦から解放されていた。言いかえれば、彼らには世界への気遣いが欠けていた」(VA: 325)。つまり「労働という活動は、もっぱら生命を維持管理することにかかずらうばかりで、世界を気にかけない」(VA: 139)がゆえに、労働に従事する労働者階級は、自己を気遣うことはあったとしても、世界を気遣うことはないのである。だとすれば、こうも言えるだろう。近代において問題となったのが、自己疎外ではなく世界疎外であったとすれば (VA: 325)、私たちが取り戻すべきは、自己への気遣いではなく世界への気遣いである、と。

では、世界への気遣いとは何か。それは簡潔に言えば、本来的で世界形成的な活動的生のことではないか。つまり、個々人の寿命を超えて世界が存続するように、活動的生を構成する三つの活動を通じて、世界を不断に維持形成し続けること — これが世界への気遣いの意味するところではないか。何度も指摘してきたように、活動的生は本来、世界を存在させるという役割を担っている。先回りして言えば、制作は人工物の世界を建設するというかたちで、行為は人間事象の世界を創出するというかたちで、労働は人工物の世界と人間事象の世界を保全するというかたちで、世界を維持形成する。簡潔に言えば、制作は世界建設的、行為は世界創出的、労働は世界保全的なのであり、どの活動が欠けてしまっても、世界は存続することができない。活動的生を構成するこれら三つの活動がすべて揃ってはじめて、世界は個々人の寿命を超えて存続することが可能となるのである。それゆえ、世界への気遣いという観点から見た場合、これら三つの活動のあいだに価値の序列は存在しない。どの活動も等しく世界を気遣い、それを維持形成するのである。

3-2. 労働という奇妙な活動 — 労働の反自然的側面

しかし、ここで一つの疑問が呈されるかもしれない。すなわち、労働はどのようにして世界と

関わるのか、労働はどのようにして世界を存続させるのか、という疑問である。『活動的生』を読むと、アーレントが労働をかなり批判的に捉えていることがわかる。労働は無世界的であるとさえ言われることもあるほどである（VA: 134）。本稿第一節で確認したように、世界は大きく分けて、人工物の世界と人間事象の世界から成り立っており、人工物の世界は制作によって、人間事象の世界は行為によって形成される。それゆえ、制作と行為は、明らかに世界と関わっており、世界を存続させている。だが、労働はどうか。労働は世界とどのように関わり、それをどのように存続させているのか。この問いに答えるうえで示唆に富むのが、次の文章である。

生命維持ほど焦眉の課題ではないが、それに劣らず自然の循環運動と密接に結びついた第二の課題が、労働には課せられている。この第二の課題の本質は、成長プロセスと衰退プロセスを相手にした終わりなき戦いに存する。自然はこれらのプロセスを通じて、人間によって打ち建てられた世界に絶えず侵入しては、世界の永続性および人間が設定した目的にとっての有用性を脅かすのである。肉体の維持管理のみならず、世界の維持管理のためにも、骨の折れる単調な労働を日々繰り返し行なう必要がある。労働のこの戦いは（肉体の必要に直接強いられた務めの自動性とは異なり）、人間と自然との物質代謝よりもおそらくずっと「非生産的」ではあるだろうが、しかし、世界とはるかに密接な関係をもっている。労働は、世界が存続するように、世界を自然から守るのである。（VA: 118-119）

労働の第一の課題が肉体の維持管理であるとするれば、労働の第二の課題は世界の維持管理である⁶⁾。そして世界の維持管理の代表例として挙げられるのが、掃除や修繕といった労働、つまりメンテナンスである⁷⁾。たとえば部屋の掃除を考えてみよう。当たり前のことだが、部屋は掃除しないと汚くなる。床にはゴミや食べかすがたまり、机の上には鼻をかんだティッシュが散乱する。どこからか異臭が漂い、何だかよくわからない虫があちこちをうろつき回る。挙句の果てには、部屋の隅っこに蜘蛛の巣が張るかもしれない。こうした惨状を避けたければ、たとえどんなに面倒くさかったとしても、私たちは毎日、部屋を掃除するしかない。極端に言えば、私たちはこの命が尽きるまで、何度も繰り返し、掃除という労働を反復しなければならないのだ。さもないと、部屋は部屋と呼べる空間ではなくなってしまう。アーレント的に言えば、制作によって打ち建てられた部屋という名の人工的空間は、それに何も手を加えないかぎり、自然の侵入によっていずれ朽ち果ててしまうのである。「人間によってつくられる物の世界がいくら丈夫だとはいえ、その丈夫さは絶対的なものではない」（VA: 161）。だからこそ私たちは、制作によって打ち建てられた人工物の世界を、労働を通じて絶えず手入れする必要がある。つまり、部屋を部屋たらしめようとするのであれば、部屋のメンテナンスは必須なのである。

労働はこのようにして、制作された人工物を手入れし、それを保全する。労働なくして人工物は存続し得ない。労働による世界の維持管理があってはじめて、人工物の世界はその存立が保たれる。労働は制作を補完するがゆえに、制作は労働を必要とするのである。「あらゆる制作、私

たちが人工物に付け加えるあらゆる新しい対象は、その永続性を確かなものとするために、労働という活動を何度も必要とする。より多くの制作が為されれば為されるほど、その産物を美しく保つために、より多くの労働が必要とされるのである」(MCT: 407)。

労働は、人間のうちにひそむ自然的なものと、世界のうちにひそむ自然的なものに対処する活動である。「人間のうちにひそむ自然的なものが、身体機能の円環運動を通じてはっきりと現われるのだとすれば、人間によってつくられた世界のうちにひそむ自然は、世界を覆い尽くし、世界の物の存続を腐敗に引きずり込んでゆく不断の脅威としてはっきりと現われる」(VA: 117)。このうちの前者に対応するのが生命の維持管理であり、後者に対応するのが世界の維持管理である。そして前者が自然的プロセスに従う営みであるとするれば、後者は自然的プロセスに逆らう営みである。つまり、労働は後者において、自然の成長プロセスと衰退プロセスに抗い、保全を通じて世界を存続させようとするのである。ここには労働の世界性=反自然性が透けて見える。自然的であると同時に反自然的でもある奇妙な活動、それが労働なのである。だとすれば、冒頭で挙げた問いに対して、こう答えることができるだろう。労働は世界の維持管理を通じて世界と関わり、保全を通じて世界を存続させるのだ、と。労働には、世界を形成する、いや正確に言えば、世界を維持するという役目がある。労働は、生命と世界を維持管理することで、人間事象の世界と人工物の世界をともに存続させるのである⁸⁾。

3-3. 世界の気遣い方——世界建設的、世界創出的、世界保全的

制作は人工物の世界を建設することで、行為は人間事象の世界を創出することで、世界を形成する。労働は人工物の世界と人間事象の世界を保全することで、世界を維持する。制作は世界建設的、行為は世界創出的、労働は世界保全的なのであり、これら三つの活動はそれぞれの仕方、世界を維持形成するのである。世界への気遣いとしての活動的生は、このようにして世界をはじめて存在させるとともに、それを個々人の寿命を超えて存続させる。これが以上の議論から明らかになったことである。

そしてこれまでの議論を踏まえて、本稿で主張したいのは、活動の場所指定が守られてはじめて、私たちは世界を気遣うことができる、ということである。本稿第二節で確認したように、活動の場所指定が守られているとき、活動的生は世界を形成するが、活動の場所指定が打破されているとき、活動的生は世界を破壊する。つまり、活動の場所指定が守られているか否かは、活動的生が世界形成的となるか世界破壊的となるかを決める分水嶺になっているのである。そして、世界への気遣いとしての活動的生が、本来的で世界形成的な活動的生のことを意味しているとするれば、活動的生を通じて世界を気遣うことができるのは、それを構成する活動がその場所指定を守っているときだけだ、ということになるだろう。世界への気遣いとしての活動的生というあり方が達成されているところでは、(労働の私的領域から公的領域への進出によって)制作が労働化することも、(制作の生産の領域から政治の領域への進出によって)行為が制作化することも、(行為の人間事象の領域から自然の領域への進出によって)世界が自然化することもないはずだ。

自然と世界はそのあいだに築かれた境界線によって截然と区別され、人工物の世界と人間事象の世界はともにその存立が保たれる。世界は自然の猛威から守られつつ、個々人の寿命を超えて長きにわたって存続するのである。政治が世界と密接に関わっているとすれば、世界を不断に維持形成し続ける世界への気遣い、および世界への気遣いを可能にする活動の場所指定は、格別の意義を帯びているはずである。

4. おわりに — 『活動的生』は何を伝えようとしたのか

本稿の目的は、活動の場所指定の重要性を浮かび上がらせること、ならびにそれが打ち破られることの危険性を示すことにあった。アーレントがなぜこの事態を危惧したのかと言えば、それは、活動がそれにふさわしい場所を超え出ることによって、活動的生が非本来的で世界破壊的なものになるからである。近代以降はとりわけこうした傾向が顕著になり、その結果、私たちは世界を気遣うことができなくなってしまった。労働する動物たる私たちには、世界への気遣いが欠けているのである。世界は破壊されゆく一方であり、世界疎外はいまだ克服されていない。社会的なものは相も変わらず拡大し、労働する動物は勝利を収めたままである。活動的生内部の区分＝分節化は、度重なる越境行為＝境界侵犯によって、曖昧なものとなっている。活動がそれにふさわしい場所を指定されているということも、私たちにはなかなか理解ができない。

では、そうした状況下であって、アーレントが『活動的生』を著わした理由は何だったのか。それは、区別をひたすら消し去っていくという近代の趨勢に抗うためではなかったか。つまり、曖昧なものになってしまった活動的生内部の区分＝分節化を明確にし、活動がそれにふさわしい場所を指定されているということを私たちに思い起こさせるためではなかったか。もっと言えば、世界への気遣いとしての活動的生というあり方を、それが今や失われてしまったからこそ、あえて提示するためではなかったか。

近代以降、世界はたしかに破壊され続けてきた。しかしそれでも私たちは、世界を気遣うことならできる。全体主義以後も「始まり *Anfang*」という希望が残り続けたように、近代以降も制作や行為といった活動は可能であり続けている。「歴史的に変化し得るのは、そして実際に変化してきたのは、人間の能力それ自体ではなく、それら相互の関係を順位づける諸能力の布置のほうである」(BPF: 62)。労働が支配的になったことは、制作と行為が完全に消え去ったことを意味するわけではない。それゆえ可能性はまだ残されている。破壊されゆく世界を気遣うこと — こうしたあり方は、今でも私たちに残されている。

註

- 1) 百木 (2018: 312-319) も、これと同様の見解を取っている。
- 2) たとえば、川崎 (2010a) の第二章「世界」と人間」でも、世界の重要性ならびに世界の多義性が指摘されている。川崎によれば、世界は「現れの世界」と「人工物の世界」の二つに分類することができる。これは本稿で提示した「人間事象の世界」と「人工物の世界」という分類と、概ね重なり合うと言えるだろう。
- 3) 原子力をめぐるアーレントの技術論に関しては、森 (2013) と森川 (2017) が詳しい。
- 4) 百木 (2018: 108-114) も、区分=分節化を明確にすること、ならびに場所を指定してやることの重要性を指摘している。本稿はしかし、それに加えて、世界への気遣いとしての活動的生というあり方を浮かび上がらせ、それぞれの活動がどのようにして世界を気遣うのかを描き出すことを試みる。
- 5) 近年のアーレント研究においては、「世界への気遣い」という概念に注目が集まりつつある。その日本における代表者が森一郎である。森 (2013, 2017, 2018) では、いずれにおいても、世界への気遣いをめぐる議論が展開されており、本稿はその議論に多くを負っている。しかし、森の議論においては、制作を通じた人工物の世界への気遣い、つまり物への労わりが前面に押し出されているため、三つの活動による気遣いがすべて揃ってはじめて、人工物の世界と人間事象の世界から成り立つ世界はその存立が保たれるという視点がやや希薄であるように思われる。
- 6) 世界の維持管理としての労働に関しては、森 (2013) の第十一章「物たちのもとで、人びととともに」、森 (2017) の第十六章「労働と世界」、百木 (2020) が詳しい。
- 7) 森 (2017) の第IV部は「メンテナンスの現象学」と題されている。アーレントの労働論や制作論を、掃除や洗濯といった営みに即して展開するというきわめて興味深い議論が、ここでは展開されている。
- 8) 労働にはこうした肯定的側面もそなわっているため、アーレントが労働それ自体を強く批判することは少ない。アーレントがもっぱら批判するのは、肥大化した労働、つまり活動の場所指定を打ち破った非本来的で世界破壊的な労働なのである。これはたとえば、制作に関しても同様である。制作それ自体は、世界を打ち建てるという肯定的側面をもっている。しかし、「制作に妥当する経験を一般化する」(VA: 186) とき、言い換えれば、制作が生産の領域を超え出るとき、その否定的側面が露わとなる。すなわち、「そうした一般化にあっては、効用と有用性が、人間の生と世界の唯一の尺度となってしまう」(VA: 186) のであり、あらゆる事物がたんなる手段へと格下げされてしまうのである。さらにアーレントは、こう続ける。「生命プロセスが対象物を我がものとして好き勝手に扱い、それを自身の目的のために利用するかぎりにおいてのみ、制作者の限定された生産的目的性は、制約なき目的有用性に転化し得る。この制約なき目的有用性は、ただ存在する物なら何であれ、手段として好き勝手に扱うのである」(VA: 187)。制作プロセスに生命プロセスが入り込むとき、つまり制作に労働の要素が入り込むとき、制作は危険なものとなる。あるいは『過去と未来の間』では、こうも言われている。「私たちを取り囲む物の世界を打ち建て、建設し、装飾する際に、どうしても支配的になる基準や規則は、それらが完成された世界それ自体に適用されるときには、妥当性を失うばかりか、きわめて危険なものとなる」(BPF: 213)。ここでは、制作を支配している目的 - 手段のカテゴリーを拡大適用することが批判されている。これらの記述から明らかになるのは、制作はそれ自体では危険なものではないということ、しかし制作が一般化され拡大適用されるとき、それは危険なものになるということである。

参考文献

1. アーレントの著作

アーレントの著作については以下の略号を用いた。

BPF *Between Past and Future: Eight Exercises in Political Thought*, Penguin Books, 1968. (= 『過去と未来の間 — 政治思想への8試論』、引田隆也・齋藤純一訳、みすず書房、1994年。)

MCT *The Modern Challenge to Tradition: Fragmente eines Buchs (Kritische Gesamtausgabe Band 6)*, Wallstein Verlag, 2018.

VA *Vita activa oder Vom tätigen Leben*, Piper, 1981. (= 『活動的生』、森一郎訳、みすず書房、2015年。)

WIP *Was ist Politik?: Fragmente aus dem Nachlaß*, herausgegeben von Ursula Ludz, Piper, 2003. (= 『政治とは何か』、佐藤和夫訳、岩波書店、2004年。)

2. その他

川崎修 (2010a) 『ハンナ・アレントの政治理論 — アレント論集 I』岩波書店。

———— (2010b) 『ハンナ・アレントと現代思想 — アレント論集 II』岩波書店。

百木漠 (2018) 『アレントのマルクス — 労働と全体主義』人文書院。

———— (2020) 「労働 — アレント思想の下部構造」、日本アレント研究会編『アレント読本』法政大学出版局、40-48頁。

森一郎 (2013) 『死を超えるもの — 3・11 以後の哲学の可能性』東京大学出版会。

———— (2017) 『世代問題の再燃 — ハイデガー、アレントとともに哲学する』明石書店。

———— (2018) 『現代の危機と哲学』放送大学教育振興会。

———— (2020) 「世界 — 耐久性、共通性、複数性」、日本アレント研究会編『アレント読本』法政大学出版局、151-158頁。

森川輝一 (2010) 『〈始まり〉のアレント — 「出生」の思想の誕生』岩波書店。

———— (2017) 「ハイデガーからアレントへ — ハイゼンベルク「不確定性原理」との対向を手がかりに」、実存思想協会編『アレントと実存思想 — 実存思想論集 XXXII』理想社、29-55頁。

Jaeggi, Rahel (2011) “Welt/Weltentfremdung“, Heuer, Wolfgang. Heiter, Bernd. Rosenmüller, Stefanie (Hrsg.) *Arendt Handbuch: Leben-Werk-Wirkung*, J. B. Metzler, pp. 333-335.

Villa, Dana Richard (1996) *Arendt and Heidegger: The Fate of the Political*, Princeton University Press. (= 『アレントとハイデガー — 政治的なものの運命』、青木隆嘉訳、法政大学出版局、2004年)